

郡山女子大 菅原文子

目的 東北地方の農村部では、従来からのこたつ、開放型灯油ストーブによる局部暖房で生活している例が多く、一般に室温が低い。そのために、特に、高齢者にとって、健康上支障を来すことが多いとの予測から、東北南部の都市周辺の1戸建住宅の調査を行った。

方法 測定対象住居は、農家5戸、一般住宅4戸について、92年12、93年1、2、3月にデータロガを用いて1日の冬季の室温を測定し、生活パターンと暖房のパターンを求めた。測定箇所は、居間、洗面所、台所（DK含む）便所である。同時に外気温の1日の測定も行い、外気温が室内温度に与える影響を求めた。そのうち3戸において、高齢者に血圧測定を行った。

結果 夜間は外気温の影響を受け、起床時には居間の室温は低くこの段階でストーブに着火するが、10時頃になると消火し、こたつのみの生活となり、夕食時に再びストーブを使用するというのが一般適なパターンであって、昼間の居間の室温は10℃前後である。この特徴は、農家、一般住宅とも同様で、人の集まる居間のみの暖房であるため、台所、洗面所、便所の温度はかなり低く、ことに便所は、5℃以下である例が多く、夜間外気温と差がない場合もあった。日中の居間の室温は健康上から、せめて20℃程度まで上昇させることが必要と思われる。

同時に測定した血圧は、寝室が北側にある場合が多く室温が低いため、起床時、便所の使用時、台所の水仕事の時上昇する傾向が認められた。